

支倉常長 遣欧使節がたどった遥かなる旅路

八柳 修之

慶長 14 年（1609）前フィリピン総督一行がヌエバエスパンア（メキシコ）へ帰還中、台風に遭い千葉県御宿の海岸で座礁、難破するという事故があった。地元民に救助された一行は徳川家康がウィリアム・アダムスに命じて建造した船で無事メキシコへ帰還した。このことをきっかけに日本とイスパニアとの交流が始まった。

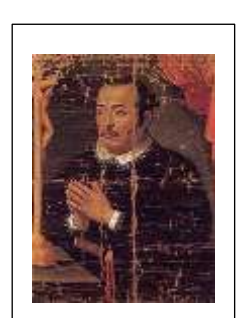
そして伊達政宗はイスパニアとの交流をはかるため、支倉常長を正使としスペイン人の宣教師ルイ・セテロを副使とする 180 人からなる派遣団をローマに派遣することにした。支倉常長、幼名六左衛門、元亀 2 年（1571）米沢城主伊達輝宗の家臣山口飛驒守常成の子として生まれ、伯父支倉時宗の養子となった。文禄元年（1592）朝鮮の役で伊達政宗に従い朝鮮の渡り戦功をあげ、柴田郡支倉村の 600 石を与えられた。伊達家家臣団の内では中級の位置。なぜ常長が大使に選ばれたかは定かでない。伊達政宗の目的は通商交渉とされているが、イスパニアとの軍事同盟を結び倒幕しようとしたという説もあるが定かではない。ともあれ、慶長 17 年（1612）常長はサンセバスチャン号でソテロとともに浦賀を出航したが暴風に遭い座礁してしまった。仙台に戻り石巻の雄勝で建造したサン・ファン・バチティスタ号で慶長 18 年（1613）9 月 15 日、石巻、月の浦をスペイン人の船乗り 40 人と 140 人の日本人が乗り込んでメキシコのアカプルコに向けて出帆した。



石巻 月の浦



復元されたサン・ファン・バウティスタ号



支倉常長

太平洋を乗り切ったサン・ファン・バウティスタ号は、**1614 年 1 月 25 日、メキシコのアカプルコ**に到着した。月の浦を出てから 3 ヶ月がたった。アカプルコは 1550 年新大陸を制覇したイスパニアがアジアに進出するために築いた太平洋側の拠点である。使節一行は、メキシコの副王に乗って来たサン・ファン・バウティスタ号を直ちに日本へ帰航させてくれるよう許可を願い出たが、日本が遠洋航海に熟達するのを恐れた副王がスペイン国王の訓令があるまで船をアカプルコの引き留めることにした。日本人 140 人のうち 26 人とソテロらスペイン人宣教師 4 人、そのほかイタリア人神父、交易商人等はメキシコシティを目指した。残された 120 名余の日本人は帰りの船の帰国許可が出る 1615 年 4 月までの 1 年 3 ヶ月ほどアカプルコ付近で暮らした模様である。何人かが、現地の人と結婚しメキシコにとどまったようであるが確証はない。

城山三郎が現地で取材し小説として発表した「望郷のときー侍イン・メキシコ」があるというが未読。



アカプルコ



銀山で栄えたタスコ



クエルナバカ 26 聖人壁画

支倉一行がアカプルコを出発し、以下、いくつかの町を経由してメキシコシティに向かった。アカプルコからカ

ラチルパンシゴ（現在ゲレロ州都、海拔 1360m）、イグアラを経て銀山で栄えたタスコ（海拔 1670m）へ。タスコから 90 km のクエルナバカ、メキシコ随一の保養地である。1981 年、私は出張で訪れたことがあるが、一日中排気ガスで覆われたメキシコシティとは違い別天地であった。ここには植民地権力者達の館、長崎で秀吉によって処刑された 26 聖人の壁画、使節一行が宿泊したフランシスコ修道院など見所多数。そして、使節団はアカプルコから海拔 2200m のメキシコシティまで 400 km、馬で 10 日間かった。



大統領府（旧ノバイスパンニア総督府）

一行がメキシコシティに到着したのは **3 月 23 日**。メキシコシティはアステカ時代からイスパニアの植民地時代をへて今日に至るまで華やいた大都市である。現在、大統領府となっている建物は植民地時代のノビスパンニア総督府。一行はフランシスコ会の聖堂に宿泊。支倉は総督（副王）に面会し、仙台藩への宣教師の派遣や通商を求める政宗からの親書を手渡した。しかし、副王にはその権限はなく、支倉を筆頭に日本人 26 名とソテロら外国人 5 人、計 31 名が海を渡ってスペインへ向かうことになった。メキシコシティを出発したのは 5 月 29 日（諸説あり）であった。



プエブラ



オリサバ山



ベラクルス

メキシコシティから、大西洋岸の港町、サン・ファン・デ・ウルアまで 424 km。途中、**プエブラ** 海拔 2600m、人口 52 万人、副王領時代の繁栄を偲ばせる豪華な建造物、陶器の町。支倉一行は大歓迎を受け闘牛を見物。**アカツィンゴ** インディオの町、海拔 1427m。メキシコ最高峰のオリサバなど 5,000m 級の山の懷を縫って高原の道が続き、そしてついに 7 月 10 日、ベラクルス、大西岸側に開いた唯一の良港サン・ファン・デ・ウルフ港に着いた。メキシコシティから 43 日間、アカプルコから 1030 km であった。

サン・ファン・デ・ウルフ港を発ち **7 月 23 日**にキューバのハバナに着いた。航海日数 13 日。ハバナには 15 日滞在し、8 月 7 日にハバナを発ち、途中三度も大しけに見舞われ 60 日間を要して大西洋を横断し、**10 月 5 日**、ついに南スペインのサンルーカル・デ・バラメダ（カディ湾のグアダルキビル川の河口にあるスペイン華やかなりし頃の軍港）に到着した。到着の 2 日前、洋上で皆既に近い日蝕を見た。日蝕は不吉な陰りと見られていたので、支倉常長の前途を占うようでもあった。

バラメダではこの地方の領主が馬車を仕立てて一行を迎え手厚くもたらした。メディナ公爵が用意してくれた 2 隻の船に分乗しグアダルキビル川を遡りセビリアの手前 12 km の**コリアデルリオ**に向かいここに 4 日間滞在、こ

こには2年後の1616年にもローマからに帰途、9か月も滞在しており、ハボン姓を名乗る使節団の末裔がいるという面白い話があるが後述。



ハバナ



サン・ルーカル・デ・パラメダ港



コリアデルの街

一行は10月21日スペイン王国最大の商業都市**セビリヤ**に到着した。風見鶏のついたヒラルダの塔、市長ら貴族が一行26人の侍たちを迎えた。一行はアルカサル宮殿に10月21日から30日まで滞在した。11月25日支倉一行はセビリヤを立ちコルドバ、ラマンチャの大地を経て12月15日、マドリードの郊外、トレド着。雪の降る寒さ厳しい**12月20日マドリード**に入った。一行は特別な歓迎式典もなくサンフランシスコ・エル・グランデ教会に滞在。国王と謁見出来たのは年が明けた1615年1月30日。時間がかかったのは支倉一行が奥州の一大名が派遣した使節であり、格式の問題だったようである。ともあれ、国王フェリペ三世に伊達政宗からの親書を読み上げるだけではなく、自らの言葉で堂々と演説したという。その内容は宣教師の派遣を要請し、交易はそれに付随する内容となっているが、政宗の本音は逆に宣教師は方便であるという。

そして、2月17日、スペイン国王臨席のもと支倉の洗礼式が執り行われた。それはスペイン王家の最大の歓迎儀式といってもよいものであった。その後、使節の中で腸チフスにかかり6人も死亡するということが起こり、さらに病人が回復するまで時間がかかり、支倉一行が**マドリードを出発したのは1615年8月22日**、猛暑に中、ローマへ向かった。バルセロナまでは620 km。カスティーリヤを出てアラゴンを通り、カタルーニャへと三つの地方を横断する。アルカラ、ダロカ、サラゴサ、フラガ、レリダ、イグワラダとイベリア高原を横断、標高1200mのモンセラートに到着、モンセラートとは鋸山という意味で奇岩の山として有名でカタルニア地方の一大聖地となっている。



セビリヤ ヒラルダの塔



正装した支倉常長



フェリペ三世



モンセラートの修道院

10月3日、カタルニアの首都**バルセロナ**に到着した。ここから船でローマへ向かうことになるが、艦は隊の司令官に対する書状にはスペイン国王の保護はローマまで及んでおり、その目的が宗教的に法王に拝謁するためではなく（商業的）交渉することを認識していたことであった。一行は数日滞在した後、3隻の船に分乗してローマに近い港町、チビヴィタヴェニキアを目指して地中海を東に向かった。この時の人数はソテロ等の外国人8名と

日本人 28 名だったとされる。バルセロナ港を出港して間もなく、予期せぬ暴風雨に遭い、南フランスのサン・トロペ湾に入港、2 日間滞在しただけだったが、初めて見る日本人に対して好意をもって迎えてくれたという。サン・トロペの領主らによる支倉等一行の日本人について、日本人は大層背が低く、陽に焼け、鼻は短く扁平、長髪、もとりは白布で結び、服装はジェスイット教法師風。食事の時、大使は教法師と食卓を共にする。肉は三本の指で操る二本の細い棒で挟む。料理人が大皿で運んでくるとお側役が銘々の分を平皿に切り分けて、小姓が各人のもとに運ぶ。日本人は掌大の和紙を懐に多く忍ばせて、一回一回漬をかんでは捨てるので、民衆が記念品を殴り合いまでして奪い合った。と記されているという。

10 月 12 日、ジェノヴァに入港、翌日、議会、総督を訪問、10 月 18 日、ローマの外港のチヴィタ・ヴェッキアに到着。支倉使節一行にとって 2 年という歳月を要した旅路に果てであった。大航海時代から海外におけるキリスト教の布教活動に力を入れていたフランシスコ会では、宣教師たちを海外へ旅立たせた町でもあった。余談だが、日本のフランシスコ会に最もゆかりの深い長崎で殉教した「日本二十六聖人」に捧げる教会ということで、のち藤沢市出身の長谷川路可のフレスコ画の群像が教会内に描かれている。

1615 年 10 月 25 日、支倉使団はローマに到着。到着後直ちにクリリナーシ宮において、非公式にローマ教皇パウロ 5 世と謁見。10 月 29 日、入市式、行列は総勢 100 数人、その中に支倉ともにローマにやって来た 15 人の日本人が含まれていた。11 月 3 日、支倉使節一行は教皇と謁見、支倉常長は受洗式を受けた。政宗の親書にはスペイン国王と会見できるように取り計らってもらふこと、メキシコとの貿易ができるよう力添えを賜りたいと書いてあったが、政宗の要請に対する返事はなかった。その後、ローマ七大寺巡礼、市庁舎に置いて公民権を受け貴族の特権状を受けた。しかし、その頃、日本では豊臣家最後の砦大阪城が落ち、天下は徳川のものとなり、キリシタン禁教令、宣教師を国外追放した。徳川幕府は宗教と貿易を切り離してオランダとの関係を深めるようになっていったのであった。



長谷川路可 日本 26 聖人



教皇パウロ 5 世



受洗する支倉常長



ソテロ

使節一行はローマに 75 日間滞在し、その間儀礼的とはいえ、それ相応な待遇は受けたが、貿易交渉と同盟締結は、何も進めることはできなかった。1616 年 1 月 7 日、支倉使節一行は**ローマを出発**、1 月 29 日、ジェノヴァに到着。常長は三日熱にかかり病床に伏すが二週間ほどで回復し、3 月、ジェノヴァ港からスペインに向かい、**4 月 17 日使節一行は 8 ヶ月ぶりにマドリッドに戻って来た。**しかし、その頃、日本でのキリスト教迫害の情報が広く知られるようになっており、支倉たちに対する人々の評判は急速に衰えていった。5 月、支倉等はマドリードを発ちセビリアへ。6 月、スペイン政府から支倉一行 21 人に帰国命令が出された。ところが、国王フェリペ三世から通商に関する何の返事を受け取ることができなかった支倉は帰国すまいと決意し、自分の病氣とソテロの足の骨折を理由に乗船を拒否しセビリアに残り、6 月 22 日、15 名のみがメキシコへ出発した。9 月 30 日、伊達政宗、支倉等出迎えのために政宗の船サン・ファン・バウティスタ号を横沢将監を団長として日本人 200 名、スペイン人宣教師等 10 名にメキシコへ送った。年が明けて 3 月 15 日、セビリア市は支倉の請願を国王に伝える決議を行わせるなど何とか返書を貰おうと手段を講じたものの、その甲斐もなく、1617 年 7 月 4 日、帰国の途に着いた支倉常長、ソテロら 5 名はセビリアから乗船、メキシコに向かい 9 月中旬、メキシコ市シティに到着し

ている。



無料画像

(この後の記録は少なく) 1618 年 4 月 2 日、ソテロ、支倉常長等はアカプルコを出港、6 月 20 日支倉一行はマニラ湾のカビテに入港。支倉はマラリアに罹り病床の身となり、翌年もマニラに滞在し支倉等一行が大坂港に 1620 年 8 月 16 日、京都の仙台屋敷に泊まり仙台に帰ったのは 9 月 22 日であった。しかし、伊達政宗は 11 月、キリシタン宗門を禁じ信徒を処刑した。そして支倉常長は 1622 年 8 月 7 日死亡。(51 歳)、前年の 1621 年 1 月、パウロ 5 世没 (68 歳)、3 月、フェリッペ三世没 (42 歳)、1624 年 7 月にはソテロは大村で火の刑に処された。

コリアデルリオのハポン 日本人の末裔か

太田尚樹「支倉常長派欧使節 もうひとつの遺産」は、著の半分を支倉使節団の一員がスペインのコリアデルリオに残った者の子孫がおり、ハポン（日本）の姓を持つ人が約 600 人もいるという興味深い話を紹介している。メキシコからスペインに渡った支倉派欧使節一行日本人約 30 名は 1614 年 10 月 5 日、スペインのグアダルキビル川河口のサンルーカル・デ・パラメダ港に入港、グアダルキビル川を遡り、コリアデルリオに上陸した。そのうちローマまで向かったのは 15 人とされる。ローマからの復路、メキシコに向けて第一陣が帰国した日本人は 15 名、第二陣支倉等日本人が帰国したのは 4 名である。入国した人数と帰国した人数に差があるのが発端。帰国した人数は明らかであるが入国した人数は約 30 名？と差がある。

太田尚樹はスペインに渡った日本人は 26 人でこのうち 8 人が日本に戻らなかったとする。またスペインの研究者上智大エレナ・ガジェゴ・アントラダは 30 人中多く見積もっても 6 人が戻らなかったという。



コリアデルソルにある支倉常長像 グアダルキビル川 日・西交流 400 周年記念に訪問された皇太子

コリアデルリオにはハポン姓を持つ人が約 600 人おり、支倉使節団から離脱した人々の子孫ではないかとする説が、1980 年代から地元歴史家による研究がはじまり、ハポン姓の人々は「自分たちはサムライの子孫」と誇りにしており、1997 年には「スペイン日本支倉常長協会」が設立されている。

コリアデルリオ周辺では稲の苗床を作る稲作農法がある。ハポン姓の幼児には蒙古斑が見られること。何より根拠とされるのは、ハポン姓が使節団以前の洗礼記録には見られないということである。

私は 1995 年 9 月、セビリアでガイドからハポン姓の存在を聞いた。セビリアに来て、理髪店に連れて行かないのかとジョークを飛ばす客がいるが、スペインの男はいい加減なところがあり、あまり働かないが、女はよく働く。その上情熱的、なにしろカルメンが出た所ですからねえと言った。そういうガイドもスペインの女に捕まった一人で、お客さんにはどこの出身か聞いて、懐かしく思うことがあると言っていた。

2013 年 6 月 14 日、天皇が皇太子時代、日本・スペイン交流 400 周年に支倉常長ゆかりの地、コリアデルリオを訪れて支倉常長像を視察、桜の記念植樹を行いハポン姓関係者と交流レセプションを行っている。

参考図書

大泉光一著 「支倉常長 慶長派欧使節の悲劇」 中公新書 支倉常長研究第一人者、自分に長男に常長を付けている。

田中英道著 「支倉常長 武士、ローマを行進す」 ミネルバ書房 メキシコ行程図をお借りしました。

太田尚樹著 「ヨーロッパに消えたサムライたち」 角川書店

写真は各都市 PR 無料画像を使用させていただきました。

以上